美入野文学

―人生余白集―

横手高校

はじめに

この本は詩、短歌、短編小説によって構成され、一題五分もかからず読めると思う。（あるいは五分を超えることもあるかもしれないけど）

あなたのふとした人生の余白に、たまにはスマートフォンではなく、この本をお供にしてみてはどうだろう。紙にのせられ、インクで書かれた文章だけが気づかせてくれることもあるのだから。

電車を待つ時間、ご飯ができるのを待つ時間、駅のホームであの人を待つ時間。ポケットに忍ばせたこの本が、あなたのほんの少し持て余したその時間を満たしてくれると嬉しい。

虹

阿部七海

田んぼ道秋風の香り鼻かすめ雪の見たさと青の恋しさ

新雪に薄桃色の紅乗せてはにかむあの子は花盛りのよう

粉雪に純白のベールかけられて君のヒロインに私はなりたい

朝焼けに単語帳から顔を上げ始発電車に一人揺られる

友と行く笑い飛ばして駆け巡る青春時代は自転車の旅

流れるままに

猿橋大知

この虫は？　知らないと言う生研部なら名無しだね名前をやろう

ツイッター制限かかり大騒ぎ僕の気持ちは見過ぎじゃないの？

夏虫の声響かせる空の中暑さと清和低空飛行

にゃんだかにゃあ

鶴田琉太郎

僕のクラスには猫山さんという人気者がいる。

彼女（多分メスだと思う。ねこのオスメスの見分け方なんて知らないけどなんとなく）はいつも昼食の始まる時間を見計らって登校してくる。そんな素行だから先生にもよく叱られていた。帰れと言われてそのまま本当に帰ってしまうことさえあった。でも最近では先生たちも諦めたのか誰も何も彼女に言わなくなった。猫なんだからきっと単位がとれなかろうが、卒業できなかろうが関係無いのだろう。

猫山さんは自分で弁当なんてもってこないから、いつもクラスの皆からもらっているんだ。でも好き嫌いが多いみたいで中々食べてくれない日もある。もらっている立場なんだから少し我慢したらいいのになって思うんだけど、クラスメイトは皆誰が一番猫山さんに食べてもらえたかで競っている。そういえばこの前、お弁当ごと外に持っていって一人で食べてたな。あの時山田君は笑ってたけど、嫌なことはちゃんと嫌と言うことが今後の関係的にも大事なんじゃないかな。まあ僕だったら許さないね。

猫山さんはいつも生徒玄関なんかじゃなくて窓から僕らの教室に入ってくる。彼女の席は窓枠だ。ついでに言うと僕の隣の席でもある。僕のクラスは進学クラスだから授業内容はそれなりに

難しいし、ペースも早い。だから集中して授業を受けてるってのに、猫山さんは教科書も開かず、ペンも持たず、眠そうにあくびをして目をこするだけだ。きっと授業は板書するより見て聞いて覚えるタイプなのだろう。

猫山さんは親切なときもある。例えば誰かが消しゴムを落としたりすると真っ先に取ってくれるんだ。まあそのままそれで遊んでるときもあるけど。

僕がこの前ついうっかり居眠りをしていたら、先生に「そんなだと猫山にも負けるぞ。」と言われた。僕は恥ずかしくなって俯きながら小さく謝った。猫山さんも僕の隣の席なんだから起こしてくれたっていいのに。そう思いながら彼女の方を見ると、彼女は「ニャー」と一言僕に伝えて目を瞑った。

学校での彼女はそんな感じ。きっと授業なんか適当に受けても勉強できるんだろうな。猫山さんがテストを受けているところを見たことはないが、もしかしたら別日に受けているのかもしれない。本当に僕は猫山さんに負けてしまうかもしれない。もう高校三年生だし、そろそろ本腰を入れるべき時かもな。

外に

高橋怜央

椅子を作りたいのです。

滴が飛び落ちて
雲も空も光り輝いている
座り心地の良い

真上の雲が電柱みてぇにのろまだぁ……

七行後

牛乳で斜線、二秒後には二十九度ぐらいの

陽光が〜
木製の
背もたれが長い

ハウスの頬が優しく身をよじらされ
木々は能無しに手を揺らす

これらを冷たくも温かくもなく
ただ茫然と脳に感じたい
お前は・君は・あなたは泳ぐから

椅子を作りたいのです。